

青春……一九五〇年〜五八年

(アルバイトで入り、のち就職してお茶の水の(社)中国研究所に通う)

温顔にてわれを雇える事務局長は 豊多摩刑務所の思想犯なりし人

(東亜同文書院出のゆさんは企画院事件で投獄されていた)

数日の鞆持ちせるにわが所長 自著にサインして吾に給うなり

(東大教授・平野義太郎氏、戴いた本は「日本資本主義の機構」)

定期的に『人民日報』など届けきて そそくさと去る丈高き人

(国交なき中国資料はアングラで入ってきた)

毛沢東・劉少奇らの論文の 下訳命じられ雀躍(小躍り)するわれ

天安門に毛沢東の声甲高く「中華人民共和国今天成立了」

(ジョンホワレンミンゴンホクオ ジンティエンチョンリーラ)

群を技く舌鋒するどき理論家は ゴルゲ事件の死刑囚なりき

(中西功さん、後に共産党参議院議員と初めて出会う)

宴にてロシア民謡所望せるは 死線越えきし政治犯なりき

毛沢東は無謬なり否さにあらず 激論の果てしたたかに酔う

ひよろひよると青白くやせたる子供みて わが子のように思えるときあり

(三鷹駅前通りにて)

ぼつねんと日盛りに佇(た)つ亀甲飴屋 父と似たるところあり胸しめらるる

もの悲し夏の夜明けはすではや 裏の林に蝸(ひぐらし)なけり

(三鷹下連雀にあった旧中島飛行機の古びた寮に住む)

食うものも喫うものもなしわが部屋を シャツ乾くまで出るも出られず

いろいろの虫が出てきて気味わるし わが借り部屋の夏の夕べは

人間の価値をきめるは金にあらじと つねに思えどつねに思えど

寂しさにまけるなというその君の 瞳のしばしうるむをみたり

朝日さす湯わかし場にて君を見染む 朝日さす頬げに美しければ

(中国研究所はお茶の水の政経ビル5階にあった)

長髪を刈れ背広で勤めよといいしわが理事を 宴の席で首締めにつけり

(イスラム研究の大家だったこの理事も今や亡し、合掌)

古びたる葉書ここにありわが友の 命亡せるよりやや古き日付けで

(親友Zは幼児を救わんと線路に入り、事故死した)

今夜もしわれ急死せばそのあとは 考え馳せて夜は白みたり

月明にシューベルト歌う土工あり 齒ぎしりしおるか汝が才能は

さらりいの遅配欠配重なりて われに何をば食(は)めしというか

(労働調査協議会に移って 給料はがた落ちした)

わが父の食の貧しさ夢に見て 明くる日早く送金したり

「父わるし、早く帰れ」という弟の 葉書を抱きて麦畑を走る

まなかいの友血を噴けり頭蓋より 身捨てんとす血のメーデーは

(この友とは、「革命近し」と説いたかの鳥打帽かむりし中退の友)

暗き酒場メーデー歌もつれる労務者の その膝元に眠るみどり児

漆夜にひかりうごめく仄見えて 不吉の報らせ運べる灯かも

幼き日みた夢一ついまも忘れず 土堤にしゃがみて泣ける亡き母

冬近き晩秋の夕べは母想う 病い冒して働き死にしわが母

(母の命日は一〇月二〇日、私が10歳の時、底冷えのする日の夕方、稲刈りから帰った母は「お

お寒」と言っただけ崩れるように庭にたおれ、私が呼んできた父に抱き上げられたまま逝った)

朽ち果てし母の墓標に涙せば 本枯らし立ちてわが不孝責む

北鮮が日本を追い越すという話 屈みてしきりにしゃべりおる二人(北千住駅にて)

あと幾年かの老夫婦らは生きるらん 社会主義日本に生きたしというも

(老夫婦の夫は高級官僚OBだったが、帝大出の一人息子が左翼だった)

雨に濡れ肩をすぼめて行くわれの いまの心をレーニンよ知るや

風邪に臥すわれをあわれみお内儀らは とりどりの菜吾に給うなり

(古びた寮に住む人たちはみんな親切だった)

高熱にたおれしわれをいつくしみ いつくしみ給えりかのお内儀らは

大雪のふぶく夕べを素足にて 銭湯に走るわが頬に涙

(銭湯には畑や森や小川をこえて二十分かかった)

凍りたる朝焼けの野面われ行けば 命に透りくるバツハの調べ

テレビみてラーメン食って帰りたり しきりにうつろなる休日の午後

庭に咲くバラの木愛でて花愛でて われめずらしく心和めり

薄紙を差し出して三日泊り行きし かのポリシェヴィーキがスパイなりしと

(彼は旋盤工上がりの党専従活動家だったが、なぜか除名処分を受けた)

時雨るる日離婚話に男泣きして油浴び マツチ構えしかのニコヨンは

(日当二四〇円の失業対策事業の労働者)

さ霧立つ麦畑行けば荒縄を 巻きたる狂女彷徨いてあり

(隣室の住人、午後はいつも着物姿で野良道をうつろに歩いていた)

麦秋の到れるたびに湧きつゝのる このかなしみの由来はなにぞ

母想う涙たたえしわが頬を ついに濡らせし蓮田吹く風

らんまんの花の都を歩めども 母亡き春の花ぞかなしき

われ想うひとはわれを想わざり われ想わざるひとわれを想うなり

青嵐吹けよ吹け吹け天地に わがかなしみを吹きて散らせや

栗の花はかなしきかなや静まりて 匂い咲けども賞でる人なし

再びは訪うこともなき山寺の 雨に打たるる山吹の花

鉢植えの夕顔を抱えしかの君は 今宵かぎりの見おさめなれば

東京のビルより見ゆる筑波嶺は やせて小さくあわれにぞ見ゆ

親不知はじめて会いし日本海 黒き海原暗き雨降る

はるかなる西多摩の嶺に茜さす この夕映えを誰に捧げん

西多摩の嶺に茜さすこの夕べ われ佇ちおれば突き刺さりくる孤独

静まれる林のなかに一人坐し 汝が名を十ぺん怒鳴りてみたり

利根川の枯葦原に疾風(はやて)吹き 満天の星「生きよ」と如くに

病癒え訪ねし友の妻手作りし 味噌汁の香りしみじみかなし

荒れ狂う冬の嵐よ心あらば 父の陋屋さけて吹かまし

荒波も岩に砕けて散りゆくを なおつのりゆくおもいはかなし

埃立つ筑波街道われ行けば 思い出の森思い出の原

(久しぶりに帰郷して)

麦畑に竜巻のぼり雀らは よろけよろけて北に向かいぬ

雨やんで虹のかかれる夏田には 水みなぎりて人生や佳し

唾(おっち) ゆえ人の手伝いして生きる 見知らぬお婆(ばば)と稲を刈りにき

「名物は薩摩芋に空つ風だんべ」と 煙管くわえて答えし農夫を愛す

本枯らしの吹き絶えてあり東(ひんがし)の 白壁土蔵三日月冴えて

本枯らしに吹き凍りたる野の道を 頬かむりの農夫よろびて行けり

盲いたる目に涙してわれを拝む 老婆のために談判に走れり

(老婆の夫はコンニャク屋の釜炊きで、大火傷して入院していた)

城跡にのぼりてみれば幼き日の　ざわめき遠く湧き立ち聞こゆ

月冴えて夜の更けわたる草原を　露踏みゆけば果てしなき夢

冬近き野分き行く夜のススキ原　きみと歩めば魂きわるわれ

われもまた老いたる先は野に出でて　土を相手に生きんと思ふ

湖（うみ）　べりの朝霧ふかき森なかに　死にてゆきたしモーツァルト聞きつつ